

あしはら

学習を支援してくださる4人の地域の方々をご紹介します

「学習支援ボランティア」という言葉を聞いたことはありますか。教室に入り、子供たちの学習のサポートをしてくださっています。中川北小学校には現在10名のボランティアさんがいらっしゃいます。その中の4名小林利子さん、高橋節子さん、青木よしみさん、小林範子さんに、50周年記念式典の後会議室でお話を伺いました。この4名のみなさんは、中川北小学校「開かれた学校づくり協議会」の委員さんでもいらっしゃいます。

みなさんは、1年生と2年生を中心に1人ずつ曜日毎に担当を決めて、午前中に活動をしています。中には午後放課後キッズの職員さんをされている方もいます。新型コロナウイルスが蔓延して休校が続いたことの影響はとて大きいと、学習ボランティアさんたちは感じているそうです。

いつも子どもたちに寄り添っているみなさんに、お話を聞きました。



〔小林利子さん〕

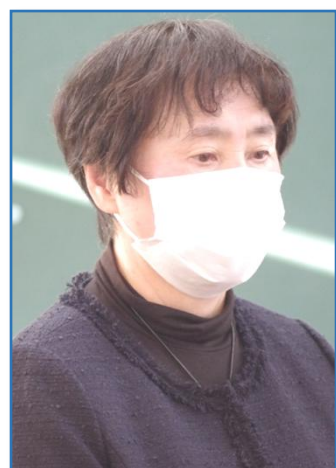
小林利子さん（以下敬称略）：自分でできる子が多かったり少し甘えんぼうさんの子が多かったり、学年ごとに特色がありますね。私たちが1年生のときは面倒を見ていた子が、5年生の展覧会では素晴らしい作品をつくっていて、その成長には驚かされたこともありました。

小林範子さん（以下敬称略）：一年生に上がったときは可愛くて抱きしめたいなという感じだったのですが、5年生6年生ぐらいになると、大きくなっちゃって。でも1年1年関わっていると、卒業式には胸がジンときますね。

——学習ボランティアをされていて、何かお気づきになったことはありますか？

青木よしみさん（以下敬称略）：鉛筆を削っていない子どもがいらっしゃる。だから私が休み時間に鉛筆削りを持って、「削っていない子は？」と回って歩くのね。そうすると「削って、削って」と言ってくるので削ってあげるのですよ。そういうお子さんを見て、自分でやる気を起こさせるような準備がご家庭で必要じゃないかなと思うのです。忘れ物がないかも見てあげてくださいね。

あと手を上げて「わからない人？」と言うと、すぐに手を上げてくれる。子どもたちがわからないところをすぐに聞けるという環境を作っているの、やっぱり学習ボランティアは必要だなと思います。なんだ、来てくれないのかとなると、学びたい気持ちの腰を折ってしまったらだめだから。子どもたちが、「来て」と言ってくれるときは頑張ろうと思っているとき。じゃないと「来て」なんて言わないでしょう？ 取り組んでいてわからなくなるのですから。



〔青木よしみさん〕

小林（利）：子どもたちの頭ってすごく柔らかいから一度覚えると忘れないものなのよ。疑問を持ったときにすぐに教えてもらえると、そのときに覚えてしまえるからいいわよね。

——子どもたちはボランティアさんどうやって接しているのでしょうか？



小林（利）：私たちの手を触ってくるわよ。「気持ちいい」って私の手の皮を伸ばすこともあって。可愛いですよ。そういうお役目もあるのかなと思います。だからね「触ってもいいわよ」って言う。あと子どもたちに「あなたの手も触らせて」と言って触らせてもらおうと、プリップリなのよ。そういうふうに触れ合える方がいてもいいかしらと思っています。ぜひね喜んでもらいたいと思う。触れ合うことに反対する人もいるかもしれませんがね。でもボランティアたちはいろいろ気をつかっていて、問題も共有して保護者のみなさんに安心していただけるようにしていますよ。みんなとてもいい子だと思います。

青木：低学年だと体を寄せてくる子もいるわよ。

小林（範）：褒めてあげると、「また来て」「今度はいつくるの？」って言う子どももいたわ。

高橋節子さん（以下敬称略）：低学年の場合はおうちの方がランドセルの中身をしっかり見て頂ければいいかしら。学校からの連絡のお手紙も読んでもらって。だいぶ古いプリントが落ちていることもあります。必ず親御さんに目を通して頂けたら、もう少し学校と連携が上手くいくのではないかと思いますね。



〔 高橋節子さん 〕

青木：子どもたち、筆箱の中を見ると鉛筆一本しか入っていないことがあります。何も入っていない子もいる。私は主に2年生をお手伝いさせて頂いているのですけれど、2年生だとお母さんの手があった方がいいですね。「お母さんが見てくれない」と言う子どももいるので、お母さんの目が届いていないのかなと思うこともありますよ。お母さまもお仕事忙しいと思うけれど、出掛ける前とかちょこっと見て頂けるといいかな。

小林（範）：私は子どもたちがとにかく可愛いです。私たちは本当にみんなのことを応援しているよって伝えたい。これからまだなんでも小学生のうちはなれるし、本当に花開いてほしいというのが私たちの願いです。自分に自信を持って学校生活を頑張ってください。



〔 小林範子さん 〕

高橋：子どもたちは楽しんでいますよね。休み時間とか他の時間は元気がよくて。だからそのままいてねと思っています。

小林（範）：私は図工を見ているのですが、やっぱりアドバイスを素直に受け入れられる子はどんどん成長しますね。素直に耳を傾けられる子どもは、最初はできなくても成長していきます。私たちはみんなのことを応援しているので、構えずに先生やお母さんの言うこと、私たちの言うこともいったん心に留めて吸収して行って欲しいな。私たちの力も試されているのかもしれないとも思います。



高橋：認めてもらっているという子どもの気持ちも必要よね。褒めて伸ばすということと同じで。認めてあげることが成長の糧にもなるのですよね。今やっていることに、「こういう風なこともプラスしたらいいじゃない？」ということをおアドバイスすることも一つの方法かもしれません。

小林（利）：いつでも味方だよと、周りから子どもに愛情を与えてあげるといいのでしょうか。大事に思っただけで、子どもってどんどん伸びると思うのよね。自分を助けてくれる人がいると思うだけで。保護者の方は愛情を上手に示せるようにするといいいかな。

青木：筆箱だけでなく、自分の身の回りを整理させることが大切なことなのかもしれません。学習意欲が出るような雰囲気を作ってあげることって大事ですね。勉強を教えることより先に。

高橋：お料理でもそうですね。準備が大事。

小林（利）：準備ができれば美味しいものができるから。私たちも昔、子どもを育てているときはたいへんでしたね。今はよく見ることができけれど。当時は筆箱なんて見なかったわよ。だけれど今思うと、こういうことが大事なのだなと思いました。



(↑手代木英明校長)

——ボランティアさんのお子さんたちはみんな中川北小学校だったそうです。ここで以前中川北小学校の副校長をしていらした、渋谷区立神宮前小学校の手代木英明校長先生も話に加わりました。

手代木英明校長（以下敬称略）：中川北小学校では東日本大震災のときに副校長でした。

小林（利）：当時、手代木先生はスマホで天気予報も調べて、運動会もサッと進めて雨が降られないうちに終わりにしたこともありました。素晴らしい先生だったのよ。副校長だった手代木先生と当時の校長先生とで学校をかえてくれたのですよ。

手代木：土曜授業というのが始まりまして。小林さんのご主人が英語教室をやってくれたこともありましたね。

小林（利）：当時の沼野校長先生と手代木先生が受け入れてくれたのです。それが今も繋がっています。

手代木：副校長は地域方と学校のパイプ役です。だから当時は地域の方と、校長、副校長がお酒を飲んだりカラオケに行ったりもしましたね。



——当時、学校はどんな様子だったのですか？

手代木：昔は1,900人の生徒がいました。プレハブ時代ですね。その頃は21学級でした。

小林（利）：いい先生がたくさんいました。今の先生方も頑張っていますね。若い先生が多くなったかな。コロナが流行してしまってできなくなりましたが、以前は寺子屋もやっていました。音読も聞いていたのですが、今はできなくなってしまっています。お母さんたちは台所をやりながらでも聞いてあげて欲しいですね。音読も大事なことから。

手代木：音読はすごく大事です。

——今は別の学校の校長先生をされているそうですが、いろいろな学校と比べて中川北小学校の特徴はどんなことがありますか？

手代木：校庭の広さが違う。中川北小学校に通っていると気づかないかもしれませんが、こんな広い校庭で伸び伸び遊ぶことができるということは、とてもいい思い出になりますよ。こっちは懐かしくてさ。全然違いますよ。中川北小学校は地域の方に愛されている学校ですね。ここは地元の方がずっと学校を愛していてボランティアになってくれる。そういえば今日乗って来たタクシーの運転手の方も中北だって言っていたな。地元を愛している方が多くいて、熱い学校ですね。

中川北小学校にいと気づくことができない学校のよさ。それは地元の方と連携して子どもたちを守っている素敵な場所だということのようです。

.....



〔学習支援ボランティア・左から青木よしみさん、小林範子さん、開かれた学校づくり協議会小林利子副会長、高橋節子さん

そして開かれた学校づくり協議会石上昌弘会長〕



みなさんありがとうございました。